

飛騨古川の地域力



古川町観光協会副会長 柳 七郎

■地域力の源泉——歴史

飛騨市古川町は、日本の中央岐阜県北部に位置している。全国のどこにもある農業と林業を中心にした町である。今も農村型の共存意識『相場意識』が非常に強く、祭り文化の伝承や区割り行政（町内会組織）によるコミュニティが確立している稀有な自治体ではないかと思う。2004年2月、2つの町2つの村が合併し3万人の人口を有する飛騨市が誕生したが、合併前は人口16,500人のある意味住民の総意を得られやすい適度な人口規模の町であった。歴史を紐解けば、まちづくりの源泉“地域力”のヒントが得られるかもしれない。

飛騨古川を中心を流れる宮川は、数々の支流を飲み込みながら、神通川となって富山県へ通じている。その宮川流域から数多くの縄文遺跡が出土していることから、古くから多くの人たちが住んでいたと推測される。大和朝廷に反逆したといわれる両面宿禰の伝承もあり、飛騨地方は独自の文化を育てていたと考えられる。

白鳳時代には、当時の伽藍跡の出土などから、全国的にも早い時期に仏教が伝来している。現在も古川町内には17のお寺があり、信仰心の深さをうかがうことができる。

奈良時代以降、徴用で多くの男達が都へ駆り出され飛騨の匠として活躍したことが、現在の大工の技術、町並み景観へとつながっていった。

飛騨を最初に治めたのは、室町時代に国司と

なってやってきた、京の公家、九条家の家臣姉小路家綱である。家綱は、4人の家臣（姉小路四天王）を引きつれ、古川町の杉崎地区に居を構え、京都の文化をいち早く根付かせた。因みに、四天王家は、今も地域における旦那衆として地域の牽引力を有し、特に文化面で重要な位置を占めている。

戦国時代には、織田信長の家臣金森長近、可重親子が増島城を築城し、現在の瀬戸川や古川町市街地の基本形を形成し、文化的にも現在へ強い影響を与えている。翌年、金森氏は高山に移り、古川の城は廃城となったが、古川は商人町として繁栄する。金森氏が山形県の上山に国替えになってからは飛騨は江戸幕府直轄の天領として支配された。

古川の伝統文化は、天領であったという歴史を無視できない。しかも、陣屋は高山にある。町の運営、文化は必然的に町人主導となる。京の文化を残しながら、古川には自由奔放な気風が生まれたのである。

その自由奔放な古川魂を『古川やんちゃ』と呼ぶが、それが最も顕著にあらわれるのが、古川祭の「起し太鼓」である。江戸時代末期に始まったこの祭りは、非常に勇壮で激しい裸祭りである。大和朝廷に抵抗する両面宿禰の伝承を祭りで見具化したのではないかとの見方もある。

市町村合併で古川町は飛騨市古川町となり、ま

ちづくりの歴史は新たなページを作らんとしているところである。「古川やんちゃ」が本領を発揮できるかどうかは今後の課題であろうか。

■まちづくりの土壌

住民を挙げてのまちづくりが始まったのは35年ほど前にさかのぼる。鯉が泳いで観光スポットとしても人気の高い瀬戸川は、第二次大戦後の生活様式の変化もあって生活廃水で汚染が進んでいた。地元ローカル新聞（北飛タイムス）が一斉清掃を行政や住民に呼びかけ、その後寄付を募り230匹の鯉を放流した。今では鯉は1,000匹を超え、一斉清掃は地域のすべての世帯（約2,000戸）が参加し、3月と11月に行われる。以前は、旦那衆が、自らの自宅やその周辺の修景に配慮した整備を行ったりしてはいたが、当時の経済力は低く、地域全体で町を守るという取組みが構築されたのは、これがきっかけとなったのではなかろうか。

■行動理念の構築

まちづくりの土壌はあったが、組織だったまちづくり運動を最初に発議したのは、青年会議所である。

都会で教育を受けた若者が、古川へ帰ってきても刺激もなく、旧態然とした地域の体質、年配者の意見だけがまかり通る状況の中で、彼らの意見はなかなか聞き入れられなかった。そこで、当時の20代、30代の青年60名が奮起して飛騨古川青年会議所を設立し、意気込んで活動を始めたものの、設立当初は行政からも市民からもなかなか相手にしてもらえない状況であった。

青年たちに光を与えたのが女優の浜美枝氏ならびに彼女のブレンである。浜氏の協力を得て地域の現状と問題点を模索した映画『ふるさとに愛と誇りを』の製作を通して、ふるさととは何か、



まちづくりのきっかけとなった瀬戸川の清掃（左）と美しい白壁土蔵街

青年としての使命は何か等共通の行動理念をおぼろげながら確立していった。

■観光協会の主な活動

古川町観光協会は45年ほど前に設立されたが、当初は観光関連業者の親睦の意味合いが濃く、具体的な事業もほとんど行われなかった。観光が産業としてしっかり根付いていたわけではないので、その会員の経営体力も脆弱で、活発な活動をするまでにはいたっていなかったのである。しかし、当時の観光協会長が「商業主義に走らないまちづくり、民間レベルで行うまちづくり」を標榜し、観光関連業者以外から若手の理事を登用することを提案した。観光協会の目的が観光から『まちづくり』に方針が変換されることにより世代交代が加速し『まちづくり』に若者の発想と行動力が生かされるようになった。ふるさとを強く意識した青年会議所の若者も、40歳で会議所を卒業すると、ほとんどが観光協会の理事として活動するようになり、さらに観光協会の活動が活発化していった。

表1 観光協会の主な活動

<p>◎町並み景観整備、保全事業</p> <p>町並み景観デザイン賞の創設（1985年）</p> <p>町並み調査（日本ナショナルトラスト）とシンポジュームの開催</p> <p>タウトレイル手法によるまち歩き冊子製作</p> <p>飛騨の匠の木組み冊子製作</p> <p>瀬戸川管理</p> <p>福全寺茶屋建設とその運営</p> <p>味処古川の建設提言とその運営</p> <p>人に優しい道（バイパス植栽）</p> <p>町並み景観シンポジウム開催</p> <p>町並み景観を通して多数の台湾の文教基金会との交流</p> <p>◎対外的イベント</p> <p>古川祭神事以外の運営とPR</p> <p>駐車場の確保整理、美化奉仕組運営、行政と神社の連携</p> <p>飛騨古川花火大会の運営</p> <p>三寺まわりのイベント化（1980年～）</p> <p>安房トンネル開通記念イベント『ふるさと飛脚便』実行（1999年）</p> <p>ふるさと切手発行の働きかけと実現（1999年）</p> <p>インターネットを利用した（katei-science.com）リリース（2003年）</p> <p>◎対内イベント</p> <p>鯉と花菖蒲まつり実施</p> <p>まちづくり創作劇『源五郎のけやき』手作り上演</p> <p>対外発刊事業</p> <p>ふるさとへの恋文</p> <p>耳で聞くパンフレット（CD）『もうじき春やぜな』</p> <p>飛騨古川のものがたり（文芸春秋発刊）</p> <p>◎提言書・行政の諮問に対する答申書作成事業</p> <p>古川町将来構想『FPC構想』答申（1988年）</p> <p>木の国ふるさとづくりの会設立（1992年）</p> <p>100万人構想提言（1998年）</p> <p>凝縮する経済と空間に生きる飛騨市創造に向けての提言書（2003年）</p> <p>合併4町村民間による『飛騨市/明日への羅針盤』提言書（2003年）</p>

■まちづくりの実践

約17年前、故野村憲一氏が町長時代、観光協会と青年会議所に地域の将来ビジョンについての諮問がなされた。かれらは、飛騨古川の将来を『FPC構想』としてまとめあげ、そのいくつかの提案は具体的に施策として実施された。



飛騨の匠文化館

瀬戸川の改修、祭り屋台の展示と起し太鼓の立体映像館—飛騨古川まつり会館—と、その周辺地域を町民の広場として24億円の事業費で建設された（当時の町の予算は50数億円）。一部住民からの反対もあったが、完成後は飛騨古川の住民の憩いの場所、また観光の中心として地域にしっかりと定着している。

隣接して日本ナショナルトラストのヘリテージセンター「飛騨の匠文化館」が建設されている。これは、(財)日本ナショナルトラストが、町並み調査で西村幸夫氏（東京大学教授）に依頼し、飛騨古川の町並みを1年間かけて調査され、その匠の技術や特徴に関する報告書がきっかけとなって建設された本格的な木造建築物である。飛騨の匠の技術や大工道具などが展示されており研究者、大工、観光客など年間約7万人の来場者でにぎわっている。古川の大工（約170人）と、住民が伝統技術のすばらしさを改めて自覚し、町並み景観整備のヘッドクォーターとしての機能が発揮され、この建物周辺の町並みの改修や、保存が加速し、現在の落ち着いた町並み景観を作り出すきっかけとなった。

表2 木の国ふるさとづくりの会の主な活動

<p>◎スポーツゾーン部会 スポーツシュレの建設提言 自然芝サッカーグラウンド・町営ホテルの実現、名古屋グランパスエイト飛騨校開設 グランパスエイト、ジェフ・ユナイテッド市原トッパチーム合宿誘致実現 2001W杯練習地としてルーマニアを逆指名、ルーマニアへの二度の誘致活動</p> <p>◎人に優しい街整備部会 国土交通省直轄 道の駅アルプ飛騨古川実現、道路のバリアフリー化実現</p> <p>◎公園整備部会 人に優しい道（バイパス植栽）街路植栽実現、町内スポット公園（緑地化実現）</p> <p>◎音楽の森整備部会 文化ホール整備計画実現</p>

■町民生活に残存していた相場意識

飛騨古川は、地域コミュニティが確立していると同時に、周囲との調和と強調を崩す『相場崩し』を嫌う地域性がある。家を建替えるにしても近所と調和するような形で足並みを揃えて、周囲との軋轢を避ける。そんな田舎の農村型共存意識（相場意識）の容認と追従の効果が、私的空間（町並み景観）形成に非常に大きく貢献している。町並み空間は、個人で作上げるものであり行政が口を挟むものではないが、その相場意識が「秩序」を産み、現在の町並み景観が形成されてきた。

一方行政も、住民の町並み景観を守る運動に呼応して、公的空間を整備しつつあり、ここでも官と民との関係が功を奏している。

■木の国ふるさとづくりの会設立

観光協会がまちづくり活動を行っているとはいえ会員は限られている。そこで観光協会は、町民全体に門戸を広げ45歳の年齢制限をして若者を集め、住民主体のまちづくりの団体の設立を一般町民に呼びかけた。120名の参加を得て、1992年に

木の国ふるさとづくりの会が発足した。以降提言書の策定や様々な奉仕活動を行っており、現在も活発な活動が展開されている。設立当初は、暗中模索の様を呈していたが、前向きな議論の中で提言書が出され、具現化するにしたがって、さらに活動が広がり現在では地域におけるオピニオンリーダーであり、大切な活動団体となってきている。

当時青年会議所の会員だった青年たちも現在は地域の各種団体のリーダーとして活動している。映画制作の過程で培った共通認識・理念があるから、地域の健全な発展へ向けたベクトルが同じ方向であることが原動力となっている。住民参加が加速され、その成功体験が住民の自信となって、よい循環を生んでいる。最近全国各地で行政と住民の協働が叫ばれているが、古川ではもう何十年も前から、行政と住民の一体となったまちづくりが行われているのである。

■町村合併への取組み

岐阜県では5年ほど前から町村合併の議論がされるようになり、飛騨地域一円で高山市を核に一つの市になるのがいいのではないかと盛んに言われるようになった。観光協会をはじめ地域の様々な団体が検討を繰り返し今回の合併については

1. 財政破綻を招いた一因に住民の過度な行政依存がある。大きすぎる合併は住民の行政依存をさらに加速する。
2. 飛騨地域一円が一つになったのでは過去にはぐくまれてきた各地の文化風土が単一化され飛騨の将来を展望すると、異なったアイテムが必要である。
3. 行財政改革を進めるには極力小さな器が好ましい。

以上の3点から飛騨で一つの合併に反対の論陣を

張り、合併最小単位である、古川町、河合村、宮川村、神岡町にて合併することを具申し合併が決定された。この機会を捉え、昨年1月から合併予定の4町村の観光協会と住民グループで、住民の自己責任と、自主的な参加、自発的行動によって、子孫に誇りを持って継承できる、安心して生活できる環境を持った飛騨市創造に向けて『飛騨市を夢見る会』を設立し、多くの課題について議論し提言書「明日への羅針盤」を策定、行政と住民へPRした。合併後、提言の一つである「飛騨市学園都市構想」が、小柴昌俊東大名誉教授を名誉塾長に具現化しつつある。

今回の合併は行政合併優先で住民には将来が見えてこない。地域づくり、行政に対する住民意識の格差、既得権による財政の無駄の排除など課題があったが、今回の取組みにより合併する自治体住民相互の理解と今回の課題、これからの活動方針等が明確になってきたと考えている。

おわりに

2004年10月の台風23号は、飛騨地域にも大変な災害を引き起こした。特に死者5名を数えるなど未曾有の被害を及ぼし、ライフラインの切断はおろか1週間にわたり孤立する集落も出た。飛騨市内だけでも、JR高山線は鉄橋の流失が3カ所に及び、復旧のめどが立っていない。国道360号線は各所で寸断されこれも、復旧に数年がかかる見通しだが、このような状態でも、市民は助け合いながら、「お互い様」と地域の復旧ために黙々と労力を惜しまない。

消防団も1週間以上も仕事を休んで、復旧に努力している。市役所の職員も不平も言わず、役人である前に市民だからと、率先して復旧活動に当たっている。戦前なら当たり前であった光景を、目の当たりにして、古川の住民がふるさとに愛着

し、困難な状況の中で自らの生き様を子供たち孫たちに引き継いでいこうと真剣に生きていると改めて感動している。

たまたま観光協会や青年会議所が発議はしたが、浜美枝氏、西村幸夫氏、まつり会館設計者の清家清氏、起し太鼓をテーマに「スピリットガーデン—精霊の庭—」を作曲された武満徹氏始め多くの先生方の御指導のおかげと、行政が民間の提言を聞き入れ真剣にまちづくりに取り組んでくれるのおかげと、地域住民が結束してまちづくりにがんばっているのおかげと、引き継がれた伝統文化のおかげと、その他様々なおかげが古川に住む人たちに力を与えている。まちづくりは一朝一夕では成り立たない。まちづくりは人づくりである。人を作ってこそ、まちづくりの精神が引き継がれる。飛騨古川の地域力は歴史が育んだ「古川やんちゃ」そのものである。

参考文献

- ・西村幸夫『町並みまちづくり物語』古今書院
- ・浜美枝『旅のお土産』酒文ライブラリー
- ・武満徹『時の園丁』新潮社
- ・みかなざりか『飛騨古川のものがたり』文芸春秋
- ・『郷土古川』（古川町教育委員会）
- ・『古川のむかしの話』（古川町教育委員会）
- ・『この一冊が未来を拓く』（FPC調査研究会）
- ・『飛騨古川金森史』（飛騨古川金森史編纂委員会）
- ・『飛騨古川タウントレイル』（古川まちづくり研究会）
- ・『なんじゃかんじゃの40年』（古川町観光協会）
- ・『新産業づくりと新観光戦略による100万人誘客構想』（古川町観光協会）

(やなぎ・しちろう)